

第1節 グループ活動

日本鳥学会員近畿地区懇談会の活動と歴史

須川 恒（懇談会京都地区世話人，龍谷大学深草学舎）

日本鳥学会員近畿地区懇談会は，山岸哲氏が信州大学から大阪市立大学に移った際に，近畿地区在住の日本鳥学会会員の小林桂助氏・坂根干氏（兵庫県），伏原春男氏（京都府）らと相談して，鳥類研究の成果を発表し論議する場とする目的をはじめた。1978年1月に打ち合わせのための第1回例会をもち，以後，年3回の例会を春・夏・冬に開いてきた。通常秋には鳥学会の全国大会があるので，3ヶ月に1回は鳥学に関する集いがあることになった。当初は3府県ではじまったが，現在では，兵庫，奈良，大阪，京都，滋賀の5府県にそれぞれ2名の世話人がいて，例会の企画をおこなっている。2年ごとに世話人が交代して事務局となり，例会の案内はメールおよび葉書で会員（2011年2月現在174名）に連絡している。会費は2年間で500円であるが，非会員でも例会には自由に参加できる。メール会員には臨時の講演会などの情報も連絡している。

例会によく使わせていただいた会場は，兵庫県は兵庫県立人と自然の博物館・伊丹市昆虫館，奈良県は奈良女子大学，大阪府は大阪市立大学・大阪市立自然史博物館，京都府は森林総合研究所関西支所・京都大学，滋賀県は滋賀県立琵琶湖博物館である。

例会は，土曜日の午後に行うことが多く，数名が鳥類研究の成果を発表し論議を行った。参加者数は15～30名程度が多かったが，もっと多くの方が参加することもあった。内容は卒論や修士論文，博士論文の一部や，多くの鳥学会会員の研究結果や研究の中間的な報告や紹介が多かった。時には一泊の合宿や，北陸鳥学懇談会と合同の例会も行った。

例会の内容で特徴的なのは，約3割弱が特定の種類やテーマの講演を集めたミニシンポジウムの企画だったことである。種類としては，サギ類，ヒヨドリ類，ハト類，カラス類，猛禽類，ガンカモ類，シギ・チドリ類など，テーマとしては種子分散，雌雄判別，IOC北京，マダガスカル，里山と鳥類，農業と鳥類などと多彩であった。近畿地

区で社会的にも関心が高かったカワウや，海鳥の重油汚染といったテーマでも例会を行った。

海外の研究者が関西を訪問する機会を生かして講演をしていただくこともあった。ロシア・マガダンのA. A. アンドレエフ氏，オハイオ大学のT. C. グラップ氏，テルアビブ大学のY. レッシェム氏，コネチカット大学のR. アスキンス氏らである。

例会の節目には記念する例会を行った。30回記念例会（1987年6月）には黒田長久氏に，50回（1994年5月）には中村浩志氏に講演をしていただいた。山岸氏が関西を離れて山階鳥類研究所に移られる際にも記念する例会を行った（72回，2001年12月）。2011年12月には100回の記念例会を大阪市大文化交流センターで行い，懇談会発足者の山岸氏に講演をしていただいた。また2007年4月の大阪バードフェスティバル（大阪市立自然史博物館）の際に，懇談会を普及啓発する目的でブース展示を行い懇談会の趣旨や過去の発表内容を図や写真で理解できるポスター展示をし，100回の記念例会でも展示した。

懇談会は当初は日本鳥学会近畿地区懇談会として鳥学ニュース（No. 6, 8, 11, 13など）に経過を紹介していたが，1990年からは日本鳥学会員近畿地区懇談会と名称を変更している（鳥学ニュースNo. 36）。現在では過去の全例会の講演タイトルと一部の講演要旨を以下のサイトに公開している。
<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/JOSK-titles.html>

近畿地区では懇談会ができてから日本鳥学会大会が1984年（三重），1992年（大阪），2001年（京都），2004年（奈良），2011年（大阪）と5回開催された。また，多くの鳥学会会員の協力によって，『近畿地区鳥類レッドデータブック』（江崎保男・和田岳編2002）が出版され，近畿地区の鳥類保護をすすめるうえでベースとなる資料となっている。国内各地に，地区単位に鳥学の研究者と多くの鳥学に関心を持つ人々が交流できる懇談会のような場をつくり続けることが，地域と深いかわりを持つ鳥学を育てる点で有益と考える。